

新CL寓話一Ⅱ

David K. Reynolds, Ph.D.
2019

第1部

2. 愛するようになるには

昔スコットという少年がいました。スコットは球技をして、クッキーを食べ、TVの漫画を見て、子供のための音楽を聞くのが好きでした。でもころんで膝を怪我したり、風邪を引いてベッドに寝ているのと、鳥は好きではありませんでした。

なぜ鳥が嫌いなのか誰も知りませんでした。彼にもわかりません。カラス、ニワトリ、カナリア、インコ、他の種類の鳥も好きではありませんでした。

「なんておかしな子でしょう」「他の子供たちは鳥が好きですよ。スコットはどうして好きではないの？」と母親が言いました。

「ぼくはどうして鳥が好きじゃないのかな」とスコットが答えました。「ジョニーもカレンも鳥が好きだし。たぶん、ぼくも好きにならなくちゃ」。

そしてスコットは鳥を好きになろうとしました。鳥たちを見に動物園に行き、鳥図鑑を読み、図書館に行きました。ほんのちょっとジョニーのペットインコを指の上に止まらせてもみました。でも鳥を好きになれませんでした。

「かわいそうなスコット」、「他の動物は好きだけど鳥がスコットを怖がらせるのかもしれないわ。どうしたらいいかしら」と母親が言いました。

それから数日たったある日、スコットは大きな問題にぶつかりました。実はその日は「問題」としてではなく、特別な日として始まったのです。スコットのおじいさんが家に訪ねて来ました。スコットはおじいさんが大好きでした。

おじいさんは年取っていますが、遊んだり、散歩に出かけたり、人と話をしたり、スコットが忙しくしているのをただ見守っていました。おじいさんの家にはおもちゃの素晴らしいコレクションがありました。裏庭に建てている家でいっしょに仕事をして、おじいさんがコーヒーを飲んだ後で、スコットに言いました。

「おじいさんは他の孫たちを訪ねて東部へ行かなければならない。数カ月で戻るけど、良くお聞き、スコット。私のカナリアの面倒をみるのに十分年がいてから私がいけない間、そうしておくれ。頼むよ」。それが問題でした。スコットはおじいさんが大好きでとても手伝いたいけれど、カナリアの面倒をみるなんて！ オオ！マイグッドネス！スコットは鳥の近くにいたくありませんでした。

でも彼はおじいさんに「面倒をみるようにする」と答えました。

「たったの数カ月間よ」「永遠ではなく」とお母さんはスコットに助言しました。

「いいね、じゃあ明日持ってきて、餌のやり方、水やり、鳥かごの掃除、夜間のカバーかけを教えるからね」、「私のカナリアの面倒をみてくれる人がみつかって嬉しいよ。カナリアは私の家族みたいなものだから」とおじいさんが言いました。

「おじいさんはどうやってそんなに鳥を好きになれたのか」とスコットは考えました。まもなくスコットを驚かせるようなことが起きるのを知りませんでした。彼はおじいさんがどうやってカナリアが好きになったか模索していました。

翌日おじいさんが2羽の小鳥をもってきました。鳥は車に乗ったせいで少し緊張しているようでした。スコットも緊張していました。しかし、彼はおじいさんのために良い鳥の世話をすると決めていました。

スコットは餌をお皿にいっぱいにして、水皿をきれいにしてからきれいな水をいっぱいにするやり方を学びました。彼は鳥かごの床に新しい紙と砂利を置くやり方を知りました。そして、カナリアが夜に暗く、暖かく眠れるようケージをカバーする方法を教わりました。

スコットがカナリアの飼い方を全部学んだのは、おじいさんが発つ時でした。

「スコットはきちんと私のカナリアを世話してくれるとわかっているよ」

「うん、ぼくちゃんとするよ、おじいさん」

「さようなら」

スコットは言った通りよく世話をしました。カナリアの世話はスコットの仕事です。まだカナリアを好きになれなかったのですが、おじいさんがスコットを信頼してくれたのを少し誇りに思いました。

スコットは良く働きました。毎日カナリアの面倒をみました。最初、小さな黄色の鳥は怖がっているようでしたが、スコットが餌皿を取り出そうと手が籠の中に伸びてきたとき、止まり木の方に飛び移りました。スコットも初めは震え、水皿から、2度も水がこぼれました。まもなくして、鳥の世話をするのが上達して、何かが変化していきました。それが何か読者はわかりません。

スコットの鳥たちへの態度が変化していったのです。鳴き声に興味を持つようになりました。籠の中で飛び交う様子やさえずる様子をじっと見つめるようになりました。時には鳥たちが鏡をつついたり、止まり木に止まって揺らすのを見て笑ったりしました。

スコットはカナリアが好きになってきたのです！鳥たちが生きるためには自分が必要だとわかりました。餌をあげ、籠をきれいにして、鳥の歌声を守りました。

ある日、1羽のカナリアの様子が弱って、スコットは悲しくなりました。翌日は元気になり今までより活発に飛び回るのを見て、自分がカナリアを愛するようになったと悟りました。

カナリアたちも初めの頃より動きが違ってきました。スコットの世話に慣れてきているようでした。彼が籠にそばに来て籠の隅で怖がってちこまったりしません。今では、スコットの手のひらにのせた餌の種やフルーツのかけらをつつき、指に飛び乗りました。スコットとカナリアたちは友だちになったのです。

それから、思ったより早くに、おじいさんが東部から戻りました。スコットは、輝く涙を目に浮かべて、2羽のカナリアに「さよなら」を言わなくてはなりません。でもその後、週に1度おじいさんの家に行ったので、鳥たちがスコットを忘れることはありませんでした。

1ヶ月が過ぎて、スコットの誕生日がきました。彼がどんなプレゼントをもらったか当ててみてください。カナリアではなく、2羽のインコでした。

もちろんスコットはインコの面倒をみて、かわいがり、いろいろな芸を教えました。

彼は鳥について学び、愛することも知りました。花やカナリア、生まれたばかりの赤ちゃんをよーく世話をするときと愛するようになるでしょう。

自分に何かを愛させることはできません。愛さないこともできません。愛は感情ですから、自分の意思で直接コントロールできません。誰かを愛しているふりをしたり、誰かへの愛を無視でき、愛を隠せますが、愛の感情を直接コントロールできません。しかし、自分の行動をコントロールできます。感情には責任がありませんが、行動には責任があります。

行動が感情に影響を与える場合があります。例えば、スコットがカナリアの世話（行動）をしたら、彼は鳥がかわいくなり（感情）始めました。ですから誰かを、何かを愛したいのなら、それにサービスをしたり世話をするのが一番です。

自分の車を磨いて、きれいにして、エンジンの調子を最高にしておく車好きな人を知っているでしょう。水をやり、風雨から守り、肥料を施し、害虫を駆除し、菊を育てている人がいます。彼の菊は他の人のものより綺麗でなくても、その菊が咲くのを楽しみに世話をします。感情に影響を与えるために行動が使えます。（アメリカ・オレゴン州CLセンター所長）